

ラテン語とフランス語

古典作品を素材に【19】

キケロ『友情論』より — 形容詞と動詞の格支配 —

秋山 学

今月は、ふたたびキケロ『友情論』からテキストを選ぶことにしましょう。

原文 Omnīnō amicitiae corroborātis iam cōfirmātisque et ingeniīs et aetātibus iudicandae sunt; nec, si quī ineunte aetate vñandi aut pilae studiōsī fuērunt, eōs habēre necessariōs, quōs tum eōdem studiō praeditōs dīlēcērunt. Istō enim modō nūtrīcēs et paedagōgī iūre vetustātis plūrimū benevolentiae postulābunt, quī neglegendī quidem nōn sunt, sed aliō quōdam modō aestimandī. Aliter amicitiae stabilēs permanēre nōn possunt. Disparēs enim mōrēs disparia studia sequuntur, quōrum dissimilitūdō dissociat amicitias nec ob aliam causam ūllam bonī improbi, improbi bonīs amīcī esse nōn possunt, nisi quod tanta est inter eōs, quanta maxima potest esse, mōrum studiōrumque distantia. — *De amicitia*, XX 74.

仏訳 En général il faut juger des amitiés une fois que se sont affermis et confirmés les tempéraments et les âges : ceux par exemple qui se sont adonnés dans leur jeunesse à la chasse et au jeu de balle ne doivent pas se considérer comme liés à ceux qu'ils ont aimés alors parce qu'ils avaient les mêmes goûts. Car de cette manière les nourrices et les précepteurs réclameront pour eux au nom de l'ancienneté l'attachement le plus vif; il ne faut certes pas les négliger, mais c'est d'une autre manière qu'il faut les juger. Sinon les liens d'amitié ne peuvent rester durables. En effet la diversité des caractères a pour conséquence la diversité des goûts qui, par leur dissemblance, dissocient les liens d'amitié et la seule raison qui empêche les gens de bien d'aimer les malhonnêtes et les malhonnêtes d'aimer les gens de bien, c'est qu'il y a entre eux l'opposition la plus totale qui puisse exister dans leur caractère et dans leurs goûts.

訳 総じて友情は、資質や年齢が既にしっかりと堅固なものになった後で、判断されるべきものである。年端もゆかぬうちに、狩猟や球技に熱中した者たちが、当時同じ嗜好を備えているた

めに好きになった者を、無二の友として持つというようなことは良くない。なぜならこのようなあり方では、乳母や訓導係たちが、古くからの付き合いを持つというだけの理由で、最も大きな好意を主張するであろうから。彼らは、なるほど等閑にすべきではないが、少し異なったあり方において、尊敬すべき存在なのである。人格的に成熟した後でなければ、友情が変わらぬものに留まることは不可能である。なぜなら、品性が異なれば異なる嗜好を追求するものであり、この品性の相違が友情を引き裂くことになるが、それは以下の理由以外によるものではあり得ないからだ。すなわち、善人が悪人と、悪人が善人と友人であり得ない理由は、彼らの品性と嗜好の相違が、互いの間で最大ともなりうるということ以外にはないのである。

原文2行目の「ineunte aetate」は、独立奪格構文ですね。すなわちこれは ineō (不定詞は iniire : 「入る」) の現在能動分詞単数奪格形 (男女中性形が、単数対格および複数主・対格形を除いて同形; 単数主格は iniēns、単数属格は ineuntis) に、女性名詞 aetās 「年齢」 (単数属格形は aetātis) の単数奪格形が添えられた構文です (この場合 ineunte は後の aetate に性を一致させているので女性形)。このように「独立奪格」と呼ばれる構文は、「奪格に置かれた主部」 (この場合は aetate) + 「奪格に置かれた述部」 (この場合は ineunte) で構成され、全体で副詞節の働きをして、時・原因理由・付随行為・条件・譲歩などを表します。英語の「独立分詞構文」や仏語の「絶対分詞節」の起源であり、最も典型的な「ラテン語的語法」の一つです。1行目に現れる «corroborātis cōfirmātisque et ingeniīs et aetātibus» も、主部・述部がそれぞれ2語ずつになった「独立奪格」です。この構文を訳す際には、奪格に置かれた2つの部分のうち、どちらが主部でどちらが述部かを見極め、主部の方をひとまず「～が」と置いてから、副詞節の用法のうち何に該当するかを考え、成熟した日本語に整えるのがコツです。

さて今回の例文には、studium 「熱意・嗜好」という名詞が繰り返し現れます。この studium の関連語としては、studeō (不定詞は studēre : 「尽力する」) という動詞がありますが、studeō は与格を従える自動詞です (「～に」尽力する)。一方名詞 studium は、目的語として属格形の名詞を支配します (「～に対する」熱意)。このような属格の用法は、「目的格を示す」英語の of、仏語の de などにもその痕跡が認められます。本文中で «vñandi aut pilae studiōsī» という句の中に現れる studiōsus は、この studium の形容詞形で、「～に熱心な」という意味を持ちますが、この形容詞は本文に見られるように属格を支配しており、同系名詞の格支配に準じています。同系の形容詞が、格支配の上で動詞に準じるのか名詞に準じるのか、個々の用例を遣いつつ規範文法のかたちで規定したのは、他ならぬキケロの功績だと言えるでしょう。

(あきやま・まなぶ)